

令和 5 年 10 月 30 日現在

機関番号：22302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00165

研究課題名(和文) 中世・近世の肖像彫刻に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Research on Medieval and Early Modern Portrait Sculptures

研究代表者

塩澤 寛樹 (Shiozawa, Hiroki)

群馬県立女子大学・文学部・教授

研究者番号：60162567

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：中世では、鎌倉・覚園寺の僧形像群を応永年間の朝祐による制作で、従来研究が遅れてきた鎌倉における希少な北京律関連の肖像彫刻と位置づけた。また、群馬・長楽寺の栄朝禅師坐像を類例稀な鎌倉時代の塑造による肖像彫刻と位置づけた。近世前期では、宮城・瑞巖寺伊達政宗像について、本像が武家肖像としては類例稀な着甲像であり、甲の一部を別材で制作する点に中世的な伝統がみられると考察し、東京・養玉院小関庄次郎夫妻像を俗人夫妻像の好例と位置づけた。近世末期から近代にかけては安本亀八の肖像彫刻に注目し、その作例は洋風彫刻とは異なり、明治後期に至るまで中世以来の伝統技法に則りながら俗人肖像彫刻を制作したことを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の肖像彫刻研究には、仏像彫刻研究に比べて研究蓄積がかなり少ない、研究対象に著しい偏りがある、作品評価の論点が「写実性」という点に偏重しているが、「写実性」という語の定義が曖昧である、といった問題点が存在してきた。本研究はこれまで等閑視されていた分野や時代についての研究を進め、総合的な肖像彫刻研究を構築することを目的とした。北京律関連の肖像彫刻、着甲した武家肖像彫刻、近世夫妻像、幕末の俗人肖像彫刻など、本研究の考察により、本研究の第一目的である従来の肖像彫刻研究の欠落部分を埋め、さらに「写実性」についても考察を及ぼし、総合的な肖像彫刻研究を構築することに貢献できたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The monk statues at Kakuon-ji Temple are created by Chouyu in the Oei era and positioned as a rare works related to the Kyoto Ritsu Shu in Kamakura, where the research has been delayed. In addition, the seated statue of Eicho at Choraku-ji Temple is regarded as a rare Kamakura period works. In the early modern period, regarding the statue of Date Masamune in Zuigan-ji Temple they say that this statue is unusually armored as a samurai portrait, and that the medieval tradition can be seen in the fact that part of the armor is made of different materials. And the images of Mr. and Mrs. Shojiro Ozeki, at the Yogyoku-in Temple are considered as a good example of the image of a secular couple. In the end of the early modern period or the modern period, I focused on the works made by Kamehachi Yasumoto, and confirmed that his works were different from Western-style sculpture, and that he produced portraits of ordinary people according to traditional techniques until the late Meiji period.

研究分野：日本彫刻史

キーワード：肖像彫刻 俗人肖像彫刻 覚園寺 安本亀八

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的背景

これまでの日本彫刻史研究の中で、肖像彫刻の研究には次のような問題点がある。

研究蓄積の量的な側面において、仏像彫刻研究に比べてかなり少ない。

この状況は、本研究を構想するに当たって、大前提をなす事実である。従来の研究のうち、包括的な研究を概観すると、早くは戦前の1941年に『日本美術大系彫刻』の中で大口理夫「肖像彫刻」が80頁を費やして、本格的に論じた。その内容は現在でも色褪せていない。その後の総合的研究は、毛利久『肖像彫刻』(1967年)、小林剛『肖像彫刻』(1969年)、原色日本の美術23『面と肖像』(1971年)などが知られるが、包括的な研究が盛んだったとは到底言い難い。後述の問題も、根本的にはこの低調な研究状況に基づく。

肖像彫刻研究は対象に著しい偏りがある。

その上で、これまでの肖像彫刻研究の大きな問題点は、研究の対象や時代に著しい偏りがあることである。研究対象では、奈良時代作の唐招提寺鑑真和上坐像等の一部の限られた古作例や、鎌倉時代を中心とする中世の僧侶肖像彫刻、特に禅宗僧侶の肖像彫刻(頂相彫刻)に研究の中心があり、中世作品の中でも俗体肖像彫刻の研究は極めて少ない。すなわち、これまで肖像彫刻研究は、仏像彫刻に比べて量的蓄積が劣るのみならず、対象や時代においても決して総合的、包括的なものではなかったといえる。

研究における作品評価の論点が作品における「写実性」という点に偏重しているが、それにもかかわらず「写実性」という語の定義が曖昧である。

従来の肖像彫刻における作品評価の視点は、近代以降重視された「写実性」という観点に大きな比重が置かれてきた。しかし、写実性という語の意味内容は広く曖昧であり、像主の姿に忠実という意味なのか、単に現実性を意味するかは判然とせず、定義なき混在がみられる。つまり、従来の肖像彫刻研究の視点や評価基準にも見直しの必要が認められる。

(2) 研究課題の核心をなす学術的「問い」

上記のように、これまでの肖像彫刻研究では、研究の対象や時代、視点・論点に大変大きな偏りがあることが明らかであるが、これからの肖像彫刻研究もこの動向を続けていいとは思われない。本研究の根本的立場はここにある。この延長上には、総合的、包括的な肖像彫刻研究は生まれにくい。また、肖像彫刻に偏りがあるままでは、日本彫刻史研究も総合性を欠いたままとなるであろう。包括的な肖像彫刻研究は、今後の新しい日本彫刻史研究を構築していく上でも大変重要な位置を占めるはずである。ゆえに、上記状況を打破するための、新しい肖像彫刻研究が必要であり、今後大きな位置を占めると予想される。

2. 研究の目的

「1」で述べたとおり、従来の肖像彫刻研究には大きな偏りがあり、総合的・包括的な研究になっていない現状がある。これを改善するにはこれまで等閑視されていた分野や時代についての研究を進めることが先決であると考えられる。

本研究の目的はまさにそこにある。従来の状況を踏まえ、一部の古作例や中世前期の僧侶肖像彫刻の偏重ではなく、これまでの研究の欠落部分を補うことを目的とした。これらの作品について、現地調査に基づいて基礎資料を作成し、一点一点作品研究を重ねながら、これまで蓄積の少なかった分野についての研究を進め、総合的・包括的な研究を可能とする条件を整え、最終的には総合的な肖像彫刻研究を遂行する。これが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究の研究方法は、以下の通りである。第一段階は、対象作品の現地調査による基礎資料作成と、日本中世・近世史、地域史に関する文献資・史料群の解読を通して、個々の作例を丹念に位置づけてゆく個別作例研究による定点化(位置付け)が中心となる。基礎資料作成では、詳細な法量計測、品質・構造、形状、保存状態などの調書を作成し、全身及び頭部を正面・背面・両側面・両斜側面・像底などの各面から撮影を行う。そして、この基礎資料に基づいて、一軀ずつ個別に位置づけてゆく。

第二段階として、造像当時の価値観や造像理念を探り、客観的な判断基準を構築しながら、肖像彫刻の全体像を考察研究する。

4. 研究成果

上記の目的を果たすべく、研究では次のような観点から調査・研究を行った。いずれの観点も従来の研究では等閑視されていた点である。以下に、その主な成果を略述する。

(1) 中世

頂相彫刻以外の僧侶肖像彫刻

この面では、鎌倉時代を中心とした各宗派の祖師像には研究が行われてきた。特に、時宗祖師像については作例の数も多いことから、一定の研究蓄積があった。

本研究では、鎌倉時代の北京律系の肖像彫刻について調査・研究を行った。具体的には、鎌倉・覚園寺の僧形像群五軀を対象とした。その結果、五軀は表現、構造の点から室町時代初期頃の制作とみられ、そのうちの南山律師坐像、大智律師坐像、俊苧律師坐像の三軀には強い類似性が認められ、三軀は一具とみられること、この三軀は伽藍神像とも強い親近性をもつことを述べた。そして、伽藍神像は像内納入の銘札により、応永二十五年（一四一八）に法眼朝祐の作であることが明らかであり、従って、南山律師坐像、大智律師坐像、俊苧律師坐像の三軀もまた同じ頃の朝祐の作と比定されることとなった。その上で、薬師堂内において、南山像、大智像、俊苧像の三軀は向かって右奥の祖師堂に、伽藍神像三軀は向かって左奥の土地堂に安置の像として造立されたと推定した。覚園寺の祖師像は、これまで頂相彫刻と形式が同じであり、その影響による作例と認識されていたこともあるが、そうではなく京都泉涌寺系の北京が当寺に及んだことにより、中国で一般的であった形式によって造られた結果、頂相と同じ形式になっただけであり、三軀は中世における北京律系の肖像彫刻群として貴重な作例であると推定できる。そして、この三軀及び伽藍神三軀の存在は、北京の導入によって薬師堂が仏殿とされ、宋代寺院に倣ってその内部に祖師堂と土地堂を設ける形が採用された中世的景観を具体的に推定させる作例として重要な意義を持っていると理解できる。

塑造による肖像彫刻

群馬・長楽寺の栄朝禅師坐像は、像高八一・四cm（衣の垂下部を含めると一二二cm余り）ほぼ人体に近い坐像で、塑造の技法により制作されている。栄朝は、栄西に師事して台密・臨済禅の双方を受け継ぎ、長楽寺の開創と共に招かれて住持となり、宝治元年（一二四七）に没するまでそれを務めた。着衣垂下部裏面の享保十八年（一七三三）の修理銘により大きな修理行われたことがわかり、本像は当初の姿のままではないが、ゆったりと自然にまとめた造形は鎌倉時代の制作とみられる。

塑造はワラ苧混じりの土を固めて造る技法で、わが国では七世紀末に中国からもたらされ、奈良時代に隆盛したが、平安時代以降は急速に用いられなくなった。しかし、中世では中国から再輸入の形で一部に用いられたことが知られている。これは中世では禅宗を中心に中国文化受容が盛んであり、彼の地で古代以来行われてきた塑造の技法が再び流入したことによる。本像もそうした中世塑造の一例といえる。

同じ時期の塑像による肖像彫刻に、鎌倉明月院の北条時頼坐像がある。この像は時頼が出家後に住んだ最明寺の蹟を北条時宗が再興して寺号を改めた禅興寺の旧蔵とみられる。禅興寺は文永五、六年（一二六八～九）に整備されたと考えられ、明月院像はその頃ないし住持の大休正念が建長寺へ移る同九年ころまでに造られたと考えられる（塩澤寛樹「北条時頼の肖像彫刻」、『鎌倉国宝館「北条時頼とその時代」』、二〇一三年）。また、大休正念の語録によれば、彼が関わって、弘安年間を中心にいくつもの塑像が制作されていることも知られる（三山進「中世塑像に就いての一考察—大休正念の語録を中心に—」、『金沢文庫研究』二一〇、一九七三年）。

これまで、塑造による肖像彫刻制作については、その作例が少なかったこともあり、関心も少なく、研究も限られていた。長楽寺栄朝像坐像は、鎌倉時代における塑造による肖像彫刻制作が一定の地域的広がりを見せていたことを示す事例であり、その点において大きな意義を有するものと考えられる。

(2)近世

武家肖像彫刻

日本の肖像彫刻の中でも一分野を形成する武家肖像彫刻は、現存作例の上からは鎌倉時代に始まっている。武家の肖像彫刻は、形式上から三つのタイプが知られる。俗体姿では、宮中における正装である束帯像、朝廷儀礼の上では略装であるが、鎌倉幕府においてはしばしば正式な儀礼にも用いられた狩衣像、そして出家後の姿をあらわす法体像である。束帯像には、山梨・善光寺源頼朝坐像、法体像には鎌倉・明月院北条時頼坐像、狩衣姿の作例には、鎌倉・建長寺北条時頼坐像、同・明月院上杉重房坐像、東京国立博物館源頼朝坐像などが知られる。武家の肖像彫刻は、南北朝時代以降になると、俗体姿の場合はほとんどが束帯姿の坐像であらわされるようになり、これが基本とみてよい。一方、武家のイメージに合う甲冑を着けた姿（着甲像）は、絵画にはみられるものの、彫刻作例の場合、中世に遡る作例はほぼ知られない。

そうした状況にあって、宮城・瑞巖寺伊達政宗倚像は、類例稀な本格的着甲像である。像高八八・六cm、足下から頭頂で一二六・三cmを測り、木造で彩色仕上げ、玉眼を嵌入する。籠は鉄製とし、兜の一部・両肩上の杏葉・前立は銅製鍍金とする。その姿は、右目を眇め、口はややへの字に閉口し、両肘を張り、左手は左腿上で甲を上にして握り、右手は腿上で軍配を執り、膝を少し開き、足先を斜め外に向けて床几に椅坐する。兜を被り、着甲して、袴を着け、靴をいて、左腰に太刀を佩く。本像は政宗の十七回忌に当たり、夫人の陽徳院が制作させた像とされ、承応元年（一六五二年）二月二十四日に開眼供養が行われたと伝える。江戸時代においても、武家の肖像彫刻は中世の伝統を承けて、束帯姿の坐像が主流であった。

例えば、徳川家康の事実上の肖像彫刻である東照権現像はこの姿であるし、大名たちの肖像彫刻も同様である。その中において、本像は特異な存在である。

加えて、籠手を鉄製とすることや甲冑の一部に銅製部品を用いること、兜、大袖、草摺などを別に造り、兜は被らせ、甲冑部品は実際の甲冑と同じように接合することも留意される。これらが、近年研究が進んだ中世の生身信仰と関連するか否かはなお検討が必要であるが、ここでは肖像彫刻にはほとんど例がない仕口であることを注意しておきたい。

近世俗人夫妻像

夫妻像は、鎌倉時代から作例が知られる。新潟・伝昌山重宗夫妻像、愛知・国分寺伝熱田大宮司夫妻像などである。両者はいずれも法体で、像主も伝承によるもので、史料的根拠はない。現存作例の少なさからみて、中世に夫妻像の制作が盛んであったとは考えられず、また造られる場合も法体が多かったものと思われる。

近世期においても、夫妻像が盛んになったとはいえないと考えられるが、それまでみられなかった作例として、俗体による町人層の夫妻像がある。その好例として、東京・養玉院小関庄次郎夫妻倚像を調査・研究した。養玉院像は、庄次郎像が像高三八・五cm、庄次郎夫人像が三四・〇cm、両像共に木造・彩色で玉眼を嵌入、寄木造によっている。庄次郎は円頂で、薄茶の長着に黒い羽織を着け、左手は脚上に置き、右手は杖を執り、顔を正面に向けて腰掛ける。夫人は白い頭巾を被り、白地に桔梗文の長着に臙脂地に藤文の打ち掛けを着け、両手は胸前で持物を執る形で、顔を正面に向けて腰掛ける。

小関庄次郎は、江戸本所牛島に建立された黄檗派の弘福寺に本尊像を寄進した人物で、その後、住持との争いから改宗し、本尊像を養玉院にもたらしたという（それが養玉院の現本尊である）。当寺の『過去帳』によれば庄次郎は延宝四年（一六七六）に没し、現在は確認できないが、像内にはその年紀と戒名を記した紙片があるという（品川歴史館『大井に大仏がやってきたー養玉院如来寺の歴史と寺宝ー』、二〇一三年）。

本は像主を確定することができ、その造立も没後間もない頃かと思われる。江戸前期において、有力町人層の俗体夫妻像が造られていたことを示す点で、意義が深い。

幕末から近代にかけての俗人肖像彫刻

江戸時代末期には、開港に伴って新しい技術や文化が急速に流入し、明治以降は国策として西洋美術が導入された。彫刻においても、江戸時代までの伝統とは異なる、新しい素材や技法による、洋風彫刻も行われるようになった。これまでの研究史では、そうした洋風彫刻に注目が集まり、仏師や仏師出身の人物の伝統的な作例は顧みられることが少なかった。しかし、そうした人々は当時の社会の中でかなりの活躍をしており、作例も残されている。今後、新しい視点で見直す必要がある。

そうした人物の一人に安本亀八がいる。安本亀八は、文政九年（一八二六）に熊本迎町（現熊本市中央区迎町）の仏師春蔵の家に生まれたといい、その後、大阪に出て生人形興行で好評を博し、次いで東京へ上って生人形、菊人形の興行を行い、明治三十三年（一九〇〇）十二月八日に七十五才で没したと伝えられる。亀八の生人形興行は大きな評判を呼び、松本喜三郎と共に、その名手として明治期には広くその名を知られていた。しかし、亀八の事績や遺作を迎れば、彼が「生人形細工人」としてのみ生きたわけではなく、仏師としての作例をはじめ、置物、絵馬（レリーフ）、能面、風俗人形、絵画など幅広い領域で制作活動を行ったことが分かる。

本研究では、彼の肖像彫刻を中心に十数軀を調査した。その結果、いずれも中世以来の仏像彫刻に通有の構造をもち、亀八が仏師としての技術を用いて制作していたことを裏付けている。その表現については、いずれも実人的ではあるものの、やや生々しさは控えめで、生人形師としての作域とは趣を変えていることが窺われた。また、一部作例には像主の写真が残されており、肖似性を有していることも確認できた。加えて、像主の人々は当時の有力町人層であり、彼らが自分や先祖の肖像彫刻を造らせ、それを自宅に安置し、その末裔たちはそれを仏壇や神棚に祀っていたことが分かったことも留意される。肖像彫刻が祀られるという扱われ方は、古代以来のあり方と同じであり、それを証することができたことにも意義があるが、自宅に自分や先祖の肖像彫刻を置くという状況は、中世から近世にかけて、日本の肖像彫刻が基本的に寺社に祀られて、礼拝されてきたことを考えると、新しい現象といえる。肖像彫刻に対する意識の変化が窺われ、これも見逃せない現象と考えられる。この観点からも諸像は意義を有するといえよう。

(3) 「写実性」について

本研究の目的の一つであった「写実性」についても考察を行い、現状の問題点や意味するところについても検討した。その結果、近代以来の研究史においては、「写実性」という言葉は現実をそのままに写したという意味に用いられることもあるが、むしろ現実そのままではなく、巧みにデフォルメされているけれども実在感はあるという場合に用いられることも多いことや、「写実性」の意味内容には精神性や内面性も含まれ、むしろそれを重視し、決して写実に徹したものではないという解釈もしばしば行われていることが分かった。つまり、「写実性」という語は、その定義が極めて曖昧であり、学術用語の体をなしていないことを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 塩澤寛樹・内川瑞穂	4. 巻 43
2. 論文標題 鎌倉・覚園寺の祖師像及び伽藍神像について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 群馬県立女子大研究紀要	6. 最初と最後の頁 35 - 54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 塩澤寛樹	4. 巻 43
2. 論文標題 鎌倉・覚園寺の肖像彫刻と伽藍神像	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群馬県立女子大研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 塩澤寛樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「太田市長楽寺の肖像彫刻」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 群馬県立歴史博物館『大新田氏展』	6. 最初と最後の頁 77-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 塩澤寛樹	4. 巻 33
2. 論文標題 「肖像彫刻における写実性 唐招提寺鑑真和上像研究史から考えるー」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』	6. 最初と最後の頁 p.1～p.28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塩澤寛樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「長楽寺の肖像彫刻」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『大新田氏』	6. 最初と最後の頁 p.78～p.80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 狛江市教育委員会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 狛江市教育委員会	5. 総ページ数 72
3. 書名 狛江市の寺院彫刻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------